

目 次

はしがき	i
緒 言	iii
序 章 「あいさつことば」研究	1
一 「あいさつことば」とは何か	1
二 方言の世界	2
三 あいさつことばの独自性	3
四 あいさつことばの理と情	4
五 あいさつことばと非あいさつことば	6
六 あいさつことばの民俗学	7
七 研究実践	8
八 高次共時論	10
第一章 朝のあいさつ	12
第一節 総 説	12
第二節 朝のあいさつの「お早う。」的表現の諸相	13
——その存立と活動——	
一 琉球方面	13
1 沖縄本島	13
2 与論島	14
3 沖永良部島	15
4 徳之島	15
5 奄美大島	16

6 喜界島	16
二 九州	17
1 鹿児島県	17
2 宮崎県	23
3 熊本県	24
4 長崎県	26
5 佐賀県	28
6 福岡県	29
7 大分県	30
三 中国	32
1 山口県	32
2 広島県	34
3 岡山県	35
4 島根県	36
5 鳥取県	38
四 四国	39
1 愛媛県	39
2 高知県	40
3 徳島県	41
4 香川県	42
五 近畿	43
1 兵庫県	43
2 大阪府	45
3 和歌山県	46
4 奈良県	47
5 三重県	48

6 京都府	49
7 滋賀県	50
六 中部	51
1 福井県	51
2 石川県	52
3 富山県	54
4 新潟県	55
5 岐阜県	57
6 愛知県	57
7 静岡県	59
8 長野県	60
9 山梨県	61
七 関東	62
1 神奈川県	62
2 東京都	62
3 千葉県	64
4 埼玉県	65
5 群馬県	66
6 栃木県	67
7 茨城県	67
八 奥羽	68
1 福島県	68
2 宮城県	70
3 山形県	70
4 秋田県	71
5 岩手県	73

6 青森県	74
9 北海道	76
第三節 「よい朝。」との表現	78
第四節 天候を言うもの	79
第五節 起きたことを言うもの	81
第六節 朝の食を言うもの	83
第七節 「どこへ行く？」	85
第八節 疲労・元気を言うもの	86
第九節 「ただ今。」	89
第二章 日中のあいさつ	90
第一節 総説	90
一 特定性	90
二 完結態・完結形	91
三 「今日は。」のほか	92
第二節 「今日は。」式のもの	92
一 「コンニチワ。」	92
二 「コンチワ。」	96
三 「コンチャ。」	96
四 「今日は何々。」の言いかた	98
第三節 「今日は。」式のほか	100
一 ややこと変わったもの	100
二 健康に関するもの	103
三 相手の「行く」ことについて言うもの	104
四 食に関するもの	105
五 天候に関するもの	106
六 「はい。」系のもの	108

七 朝・昼・晩に用いられるもの	110
第三章 晩のあいさつ	112
第一節 総説	112
一 あいさつことばの一特性にふれて	112
二 あいさつことばのもっともあいさつことばらしいもの	113
三 「今晚は。」形式	114
四 朝・昼・晩のあいさつのことばづかい一般の整理	114
第二節 琉球地方の晩のあいさつ	115
第三節 九州地方の晩のあいさつ	116
第四節 中国地方の晩のあいさつ	121
第五節 近畿地方の晩のあいさつ	127
第六節 四国地方の晩のあいさつ	128
第七節 中部地方の晩のあいさつ	131
第八節 関東地方の晩のあいさつ	139
第九節 奥羽地方の晩のあいさつ	142
第十節 北海道地方の晩のあいさつ	149
第十一節 むすび	151
第四章 途上の別辞	153
第一節 はじめに	153
第二節 「アバ ヨ。」類	154
第三節 「サヨナラ。」類	167
第四節 「ソンナラ。」類	177
第五節 「ソイデワ。」類	183
第六節 「マツ。」	186
第七節 「マタ、……。」方式	187
第八節 「イマ。」類	189

第九節 「コンド。」類	193
第十節 「ノチ。」類	193
第十一節 「オヤガッテ。」	196
第十二節 「オセッカク。」	196
第十三節 「あした。」「明日。」	197
第十四節 「コレ」系	199
第十五節 「サー。」その他	200
第十六節 特異なもの	200
第五章 謝礼のあいさつ	206
第一節 総記	206
第二節 「ありがとう。」表現法の存立と活動	207
○ はじめに	207
一 九州地方の「ありがとう。」表現法	207
二 中国地方の「ありがとう。」表現法	213
三 四国地方の「ありがとう。」表現法	216
四 近畿地方の「ありがとう。」表現法	219
五 中部地方の「ありがとう。」表現法	222
六 関東地方の「ありがとう。」表現法	230
七 奥羽地方の「ありがとう。」表現法	232
八 北海道地方の「ありがとう。」表現法	238
第三節 「堪え難い。」表現法の存立と活動	239
付 「タマル カ。」	241
第四節 「オーキニ。」表現法の存立と活動	241
一 現 実	241
二 考 察	249
第五節 「ダンダン。」の存立と活動	252

一 「ダンダン。」の現実	252
二 「ダンダン。」の歴史	257
第六節 「サイサイニ。」	258
第七節 「ベツタリベツタリ。」ほか	259
第八節 修飾系のものいろいろ	261
一 「ヨー。」の類	261
二 「チカゴロ」	262
三 「オカゲデ」	262
四 「ドーモ。」	263
第九節 よろこびの謝意を直叙するものいろいろ	264
一 「ゴチソーサマ。」	264
二 「オホンノー ゴザイマス。」	265
三 「ご念のいりまして。」	265
四 「かたじけない」と言うもの	267
五 「もったいない」と言うもの	268
六 「めでたし」と言うもの	268
七 「尊く貴い」を言うもの	269
八 「重畳」を言うもの	270
九 「デカシマシタ。」	271
十 「ご造作よ。」	271
十一 「ヨー シテ タモツタ。」	271
第十節 謙退の情意をあらわすものいろいろ	272
一 「すみません。」	272
二 「申シワケ アリマセン。」	272
三 「ごやっかい」を言うもの	272
四 「オキノドクナ。」	273

五 「オタイギカケテ スミマセン。」	273
六 「わるい」を言うもの	273
七 「大変だった」と言うもの	274
八 「イヤナ コッチャ。」	274
九 「コワイ コッチャ。」	274
十 「ウタテー コトジャ。」	274
十一 「ウイ コト ナーシ。」	275
十二 「もっけ」を言うもの	275
十三 「お笑止な。」	275
十四 「過分ヤ。」	277
第十一節 一見奇異なもの	277
第十二節 琉球方面のもの	279
第六章 一般的な「ことわり」のあいさつ	285
第一節 「ご免 ^{めん} なさい。」形式のもの	285
第二節 「ご赦免」との言いかたをするもの	287
第三節 「ご容赦」との言いかたをするもの	288
第四節 「勘弁」との言いかたをするもの	288
第五節 「堪忍」との言いかたをするもの	289
第六節 「お赦しな。」方式	290
第七節 「こらえて」との言いかたをするもの	291
第八節 その他	292
第七章 途上出あいでのあいさつ	294
第一節 「やあ！」との単純なもの	294
第二節 「どうしている？」と問いかけるもの	294
第三節 「早いなあ。」	295
第四節 「食ったか。」に関するもの	295

第五節 「いいあんばいだね。」	295
第六節 「どこへ行く？」	296
第七節 「久しぶり」との気持ちをあらわすもの	297
第八節 「お元気？」	300
第九節 「寄れ。」「来い。」のあいさつ	301
第七章 途上別れのあいさつ	302
第八章 出かける時のあいさつ	306
第一節 「行って参じます。」	306
第二節 「行ってまいります。」	306
第三節 「行ってきます。」	307
第四節 「行ってクル」との言いかたをするもの	307
第五節 「ただ今。」	308
別 記 送ることば	309
第八章 帰着のあいさつ	311
第一節 「今」との言いかたを主調にするもの	311
第二節 「タダイマ」との言いかたを主調にするもの	313
第三節 「もどりました。」	315
第四節 「帰りました。」	315
第五節 「来た。」	316
第六節 「行って参じました。」	316
別 記 帰着をむかえることば	317
第九章 人家訪問のあいさつ	318
第一節 総 説	318
第二節 簡素直截のもの	319
第三節 「ご免」系のもの	324
第四節 「おゆるしなされ。」	326

第五節 「罷り出申した。」など	327
第六節 朝・昼・晩の訪問	328
第七節 食事のことを言って	329
第八節 「居るか。」の類	330
第九節 琉球方面のもの	332
別 記 訪問者をむかえることば	333
第十章 人家辞去のあいさつ	338
第一節 琉球方面のもの	338
第二節 簡潔なもの	341
第三節 「おいとします。」	347
第四節 「ご無礼（失礼）……。」	347
第五節 「ご免……。」	348
第六節 「おせわになりました。」	349
第七節 「おじゃま……。」	350
第八節 「ごやかかい……。」	351
第九節 「おやかましゅう……。」	351
第十節 「長居……。」	352
第十一節 「またお目に……。」	352
第十二節 「お先に……。」	353
第十三節 夜分辞去	353
第十四節 食事のことを言って	355
第十五節 「去ぬよ。」	356
第十六節 「行くよ。」	357
第十七節 「また来るよ。」	359
別 記 辞去者への送辞	361

第十一章 親類づきあいのあいさつ	370
第一節 汎 説	370
第二節 婚礼でのあいさつ	372
第三節 出産祝いのあいさつ	375
第四節 建築祝いのあいさつ	377
第五節 くやみのあいさつ	377
第六節 病気見まいのあいさつ	379
第七節 一般訪家〈親類〉のばあい	381
第十二章 近所づきあいのあいさつ	389
第十三章 天気・時候のあいさつ	392
第一節 総 記	392
第二節 晴雨寒暑のあいさつ	394
一 晴	394
二 雨	395
三 寒	396
四 暑	398
第十四章 労作関係のあいさつ	400
第一節 はじめ	400
第二節 時機・場面などに注目しての小分類に応じた記述	401
一 「朝も早く」	401
二 作業を問う	401
三 「精出す」	402
四 「気ばって」	402
五 「お稼ぎ」	403
六 いそがしいことを言うもの	403

七 「ご苦労」	403
八 「きつい」	404
九 「えらい」	405
十 「ご難儀」	405
十一 「ご大儀」	406
十二 「お疲れ」	406
十三 「がまん」	407
十四 「ぼつぼつ」「そろそろ」〈しごと中へ〉	408
十五 ひる上がり	408
十六 昼食に関して	409
十七 「茶を」	409
十八 夕がた	410
十九 天気を言う 作を言う	410
第十五章 年中行事関係のあいさつ	412
第十六章 物売りの声	413
第十七章 買い物ことば	415
第十八章 返事ことば	420
結 語	422
「あいさつことば」研究文献	423
索 引	
I 事象索引(主要「あいさつ文(あいさつことば)」彙集)	428
II 事項索引	443

序 章 「あいさつことば」研究

一 「あいさつことば」とは何か

考えてみれば、人の会話はみなあいさつである。(「挨拶」とは、「おしあつて進む」の意のものであるという。)会話の特定化したものが、いわゆるあいさつことばである。——あいさつ表現の形式である。

人間の会話一般と、あいさつことばの存立とは、深く関連している。

あいさつことばは、会話の基本とも考えられるものではないか。会話生活の起点とも考えられるものではないか。言語生活の必然として、あいさつことばの生活が存在している。

杉本つとむ氏の『方言風土記』(雄山閣)には、つぎの記事が見える。

沖縄では、あいさつのことをかなみという。これは、あいさつが人間交際上の要であるところからでている。

あいさつことばは、人間の言語生活——交話生活——の原点にあるものと言うことができようか。あるいはまた、あいさつことばは、人間の交話生活の原態を成すものとも、言いすすめてもよからうか。

方言生活の実情を傍受してみると、その平常の会話には、あいさつことばが多い。あいさつことばの意義と存立とが、ここでよくわかる。

あいさつことばの研究は、「会話の研究」という大見地のもとで、とりおこなわれるべきものでもあろう。また、会話の研究は、あいさつことば研究の発展・展開として、とりおこなわれるべきであらう。

方言会話の研究に関しては、拙著『方言学の方法』(大修館書店)の中に、いくらか述べたものがある。

人間会話の研究が、言語研究上の基本問題であると同時に、あいさつことば

第一章 朝のあいさつ

第一節 総説

英語圏では「Good morning.」が慣用されており、独語圏では「Guten Morgen.」が慣用されている。「よい」とのことばがつかわれて、相手に対する祝福の意が表明されている。中国語の「早上好。」もまた同巧のものである。

日本語にもっともふつうの「お早う。」「お早うございます。」の類は、やや中国語のものに似ていてしかも独自である。——ひとえに、早いことが強調されている。「Good morning.」などでの、実内容を言うことが明白な表現法に対して、日本の「お早う。」などは、もっぱら、早いことそのことを表現内容とするものである。わが国では、朝、早くも無事に起きでたことが祝福されている。

わが国の演劇の世界では、人々の楽屋入りで、たとえそれが午後であっても、「お早う。」「お早うございます。」とのあいさつことばがかわされるという。なるほど、これもまた、早いことそのことが祝福されて当然のことである。無事の出が、たがいに好ましくとりたてられているというわけであろう。

わが国の朝のあいさつには、「早い」ということばをつかうのではないものもある。しかし、それらもまたおしなべて、「お早う。」的精神のものと見ることができよう。「けさはまだでした。」と、朝のあいさつをしても、「きょうはまだお目にかかりません。」と、朝のあいさつをしても、これらがみな、「お早う。」的表現の精神のものになっている。「朝」ということと、「早い」ということとは、人間の健康な生活で、必然的なむすびあいになっているとされるか。

第二節 朝のあいさつの「お早う。」的表現の諸相

——その存立と活動——

一 琉球方面

いわゆる南島——西南諸島——を手はじめに、西から東へと、諸相を全国的に見ていく。

1 沖縄本島

兼島恵義氏の「沖縄島尻郡糸満町方言のあいさつことば」(『方言研究年報』第六巻)には、朝のあいさつことば、「ヘーウキ シンソーチエーン ヤー。」(早起き していращやいます ね。)などが見える。

石川友紀氏の「沖縄那覇市首里赤田町方言のあいさつことば」(『方言研究年報』第六巻)には、

○チュー ウガマピラ。(この「ウ」は/'u/)

今日 拝みましょう。

というのがあり、「これも、中年以上の者が、時刻に関係なく用いる。やや丁寧な、出会いのあいさつことばである。」とされている。

中松竹雄氏は、「あいさつお国めぐり 2 沖縄の巻」(『言語生活』第三百五十号)で、

沖縄では日常のあいさつ語に限っていえば、一日の中を特に朝昼晩とはっきりと区別して使い分ける習慣は一般的にはない。たとえば、首里では時刻に関係なく最も親しい間柄の者に面会した際には、相手が目下であれば、単に「ハイ」という。

と述べていられる。

比嘉春潮氏の「中頭郡西原村に於ける日常の挨拶」(外間守善氏編『沖縄文化論叢 5 言語論』 平凡社)には、